

第 17 回茨城県障がい者スポーツ研究会 シンポジウム報告書

1. シンポジウムの概要

第 17 回茨城県障がい者スポーツ研究会のシンポジウムは 2021 年 12 月 12 日(日)14 時から 16 時に、Web 会議システム「Zoom」を使用してオンラインにて開催された。本シンポジウムでは、茨城県内のパラスポーツ環境の現状と課題を見つめ、どのようなニーズがあるかについて検討することを目的とした。テーマは「茨城県のパラスポーツ環境を考える～する人から見た現状と課題～」である。まず、筑波大学アダプテッド体育・スポーツ学寄附講座主催で行った、県内のパラスポーツの現状や課題についてパラスポーツを「する人」と「ささえる人」の立場から懇談した「ざだんかい」の様子を 10 分程度視聴した。次に、筑波大学体育系松原の司会で、パラスポーツを実施している当事者 1 名、当事者の保護者 2 名、特別支援学校関係者 1 名の登壇者により、テーマに沿った話し合いを行った。最後に、参加者からの質疑応答を行い、研究会会長の筑波大学体育系齊藤まゆみの総括で会を閉じた。

日 時：2021 年 12 月 12 日（日）14:00～16:00

参加費：無料

テーマ：「茨城県のパラスポーツ環境を考える～する人から見た現状と課題～」

登壇者：川又 友美（保護者）

松崎 勇司（保護者）

松本 亘（日本パラサイクリング連盟 理事）

小沼 博義（茨城県立つくば特別支援学校）

司 会：松原 豊（筑波大学）

主 催：茨城県障がい者スポーツ研究会

筑波大学

共 催：茨城県障がい者スポーツ指導者協議会



(写真：シンポジウムの様子 Zoom)

2. 内容

2-1. パラスポーツを始めたきっかけ

興味を示していたものや、たまたま近所にあったスポーツクラブへの参加がパラスポーツを始めたきっかけになっていた。また、リハビリがきっかけとなり、地元のチームを紹介してもらってリハビリ後も続けていたという声もあった。一方、スポーツを行うにあたり、障害が壁となり、スポーツ教室への加入を断られた経験や、保護者自身の葛藤があったことが話された。

—自閉症でこだわりが強い中、水遊びが大好きで、水泳教室に通わせようとしたことが始まりである。しかし、地域や市、県の水泳教室に入りたいと思っても、断られることが多かった。そんな中、水戸市にある、身体・知的障害を持つ、子どもから大人までを対象とした水泳教室を見つけ、通い始めて以来、趣味としてではなく競技として行ってきた。現在は引退したが定期的に泳ぎに行っている。(川又)

—言葉が遅く表情がないことから、病院に行ってみたところ自閉症と診断された。一般の子どもたちと生活させたいと思い、障害を受け入れてくれる幼稚園を探し、入園、小学校も支援員を申請して通常校に通った。幼稚園の運動会のダンスや、小学校の運動会での集団種目で、他の子どもたちと同じように動いている様子に驚かされたことを覚えている。また小学校の運動会、親子で参加した障害物競走で3位になった時に、「お父さんのおかげで3位になった！」という子どもの嬉しそうな様子から、スポーツの力、その大切さに気づいた。ここからスポーツをさせようと思ったものの、障害があるため、スポーツ教室に入れてもいいのかという葛藤や、どうしたらいいのかという悩みがあった。中学校になって、やはりスポーツをさせたいという話になり、小学校の頃興味を示していた野球を始めようと、チームを探していたが、見つからず断念した。しかし、たまたま、地元知り合いが会長を務めるバドミントンの少年団チームがあり、付き添いを条件に練習に参加したことが競技としてスポーツを始めたきっかけである。少年団の小学生に交わりながら、中学生の息子は練習に参加していた。(松崎)

—19歳の頃、事故で障害を負った。リハビリのスポーツで車いすバスケットボールに出会った。当時は、バリアフリーもほとんどなく、インターネットもなかったため、他のスポーツの情報等はなかった。リハビリ後、帰る地域の車いすバスケットボールのチームを紹介してもらい、そこで続けた。車いすバスケットボールがあることで、人とのつながりや、生活の仕方（北海道に住んでいたため雪への対処の仕方等をチームの人に教えてもらっていた）の学びに繋がっていた。(松本)

2-2. 現在のパラスポーツを行う時の苦勞とは。周囲の人に聞かれた時にどう答えているのか。

登壇者がスポーツを始めた頃に比べ、現在は参加しやすい傾向にあることが話された。しかし、条件があったり、競技や地域において差があったり、苦勞しているようである。また、その競技と出会うまでに課題があり、茨城県をはじめ、日本全体で、「どこで、どんな競技」が行われているのかという、情報がすぐにわかるような仕組みへの要望があった。

—15-20 年前と比較して、水泳教室等への参加は比較的しやすい環境になっている。現在、息子はスポーツジムに入会し、週 1 回水泳を行っている。迷惑をかけるのではないかという自身の不安や、自閉症を知らないという周り方々の不安があり、お互いの不安解消のために、父親がプールサイドで見守ることを提案した。お互いの経験不足から来る不安は、経験していて解消するということが、良くも悪くも大切だと感じている。参加しやすい環境にはなっているが、様々な条件がある。自身の知り合いのお子さんたちもそういった条件の中で参加している。(川又)

—まず、競技における格差があると思う。そもそも、バドミントンは国内大会では知的障害のクラスが存在するものの、国際的には認められていない。先日の東京パラリンピックでもバドミントンには知的障害クラスがなくショックを受けた。また、地域における格差もあると思う。茨城県内の障害者のバドミントンクラブはおそらくない。全国大会にエントリーした際も、知的クラスは県内 1 人のみであった。知り合いから教えてもらった県外のバドミントンクラブでは、自閉症も車いすも、いろいろな障害を持った人たちが、近くの大学生の人のサポートを受けながらみんなで練習していた。中学 2 年生くらいから、週 1 回ペースでその練習に参加していた。バドミントンと合わせて陸上競技も行っていたが、県内で障害者と一般の人（健常者）とが一緒に練習するという環境はほとんどない。年齢が上がるにつれ、環境面では苦勞しており、一般の人（健常者）に合わせるしかないと思っている。(松崎)

—現在だと、インターネットで探せば出てくるため、情報は入手しやすいと思う。現実的には、車いすスポーツの場合、車いす販売業者の方とのコミュニケーションの中で出会うことが多い。東京パラリンピックのおかげで、パラスポーツの認知度で言えば普及していると思う。しかし、その競技にどうやって出会えるのかが課題である。アクセス面を含めて考えなければならない。茨城県だけでなく、日本全体で、「どこで、どんな競技をやっているのか」という情報が 1 発で探し当てられる何かが欲しい。県レベルでも、障害種レベルでも探せるような。(松本)

2-3. 県内の特別支援学校でのスポーツ実施、卒後のスポーツ実施状況について

現在、特別支援学校の教頭を勤める小沼先生からは、県内の特別支援学校での部活動の実態や、課題の発表があった。学校に通っている間は体育によって、運動機会が保障されているとは言え、スポーツライフとして満足いくものであるとは限らないことや、卒後に繋がる支援ができていないこと等のお話があった。

一県内の特別支援学校は合計で 25 校存在する。自身の学校は校区が広いため、スクールバス 11 台に加え、親の送迎車、放課後は放課後等デイサービスの送迎車で、児童生徒が通学している。体育以外の運動として部活動を設けているが、1つの種目に絞ると人数が集まらないため、総合運動部として、大会が近くなったら、その種目を行うというスタイルを取っている。知的障害部門の総合運動部では、「IFA インクルーシブほほえみリーグ」や茨城県特別支援学校体育連盟の主催するスポーツ競技会（サッカーやバスケットボール、陸上競技等）に参加している。肢体不自由教育部門の総合運動部では、ボッチャ甲子園の予選会等に参加している。自身の学校における、部活動の課題として「参加児童生徒の通学（送迎）」「大会参加者数（多すぎ・少なすぎ）」「大会参加経費（バス代の人数割り）」「担当職員の勤務様態（働き方改革）」が挙げらる。「参加児童生徒の通学（送迎）」では、スクールバスで学校に通っている生徒や、放課後等デイサービスに通う生徒は部活動への参加が難しいという現状がある。「大会参加者数（多すぎ・少なすぎ）」については、参加者数が確保できず、大会に参加できなかつたり、一方で、参加人数が多すぎて、大会会場に行ったものの、試合に出られなかつたりした経験がある。「大会参加経費（バス代の人数割り）」では、部活動として大会に参加する場合、バス代を別途集金するため、大会に参加する際の費用が高くなってしまう。「担当職員の勤務様態（働き方改革）」については、管理職の立場から、担当職員の負担になることを懸念している。

こういった課題は他の特別支援学校でも見られ、一部の教頭の間で、学校の部活動や障害者スポーツにおける課題を明らかにするという目的で、簡単な調査を行ってきた。休日に部活動を実施している学校は少なく、実施できていない理由には、学校までの移動が困難であるというアクセス面での課題や、広すぎる通学区域の課題が見えてきた。また、卒後の運動・スポーツに関して、支援したい気持ちがあるが実際はできていない学校が多いという現状がある。ただし、卒業生単独に支援している学校は少ないが、現役生の部活動の練習日程を卒業生に共有し、自主的に参加する形で、現役生と卒業生が一緒になって運動・スポーツをする機会を設けている場所もいくつかある。調査をしてきて、県内の特別支援学校の部活動全般に係る課題がいくつか見えてきた。例えば、「遠方から通う生徒の時間や交通費の負担が大きいこと」、「遠方が故に活動時間が制限されてしまうこと」、「休日の練習や大会参加等への移動は、すべて保護者の協力の下、成り立っていること」そして「せっかく学校で運動・スポーツの楽しさがわかったとしても、卒後の支援がないため、途絶えてしまうこと」等があった。（小沼）

2-4. 今後の茨城県のパラスポーツの課題と展望について

茨城県内のパラスポーツの課題として、障害者を受け入れるクラブチームの少なさや、学校組織の繋がり、用具へのハードルの高さ等が挙げられた。体験会といった、気軽に出会える環境の整備が今後の展望として考えられた。

―水泳を始め、どこにも受け入れてもらえなかった当時は、活動できる場を自分たちで作ろうと、保護者で集まってクラブチームを立ち上げた。地域の社会福祉協議会等の行政の力を借りながら、障害を持っても、水泳ができるようになった。茨城県内のパラスポーツはまだ広がっていないように感じる。県外の活発な場所は、クラブチームが多く、競技人口が多かったり、健常選手と同じように、障害者も選手として育てられる環境があったりする印象がある。茨城県も、卒業後もスポーツをずっと続けられるような場所、クラブチームが増えること、障害の有無関係なく、選手を育てる環境が整うことができれば、障害者にとってスポーツを行うという垣根が低くなるのではないか。(川又)

―中学校時代、公式戦に出たいと思い、特別支援学校所属であったが、中体連の大会に申し込もうとした際、運営の組織が違うために断られた。参加したいだけだったのに、参加すら許されないのかと思うとショックだった。オープン大会は、親の付き添いの条件のもと参加させてもらえた。中体連、高体連、特体連という組織の横のつながりができてほしい。(松崎)

―大会参加について、登録費の問題や、大会運営や強化といった組織運営の面が壁となり、組織をまたいだ大会参加が難しいという現状がある。(小沼)

―パラスポーツの普及に伴い、用具の高額化が進んでいる。これは、用具が不可欠な肢体不自由者にとっては、スポーツを行う上での高いハードルになっている。もっと気軽にできる体験会のような、環境の確保が課題である。また、自身もパラスポーツを楽しむにとどまっており、育成や普及ができていない。他県では、特別支援学校にパラスポーツの競技団体が出向いて、競技用の車いすを紹介したり、体験会を開いたりしている。このように、子どもたちがパラスポーツに出会うきっかけや、体験できる環境を、作っていきたい。(松本)

3. 参加者からのコメント

子どもが部活動のない特別支援学校に通っているため、地域のスポーツ教室に入って水泳とサッカーをしている。しかし、障害の種類が違うからと練習の参加を断られたり、練習への参加ができて、障害種が違うからと、大会参加を断られたりした経験がある。やりたくてもできないという皆さんの経験に共感したものがあつた。障害者がスポーツをするために、環境づくりのために掛け合うというのではなく、ちょっとチャレンジできるような、少しかじることができるような、ウェルカムな雰囲気があると嬉しい。(参加者 A)

地域差のお話があつたが、東京に近い地域は施設なども充実しているようには思う。東京が仮に進んでいるとして、徐々にその流れが広がっていったらと思う。「参加してもいいよ」という態度ではなくて「ウェルカムですよ」という態度が伝わっていかないといけないと思っている。障害者のことやパラスポーツのことなど、知らないという人が多いことを経験で得た。自身も教育に携わっているので、学生たちに伝えて行かないといけないなと思っている。(参加者 B)

4. 総括

今日、話をしてくださった皆さまありがとうございました。貴重なご意見をたくさん伺えたと思います。共通していたのは、「スポーツに出会うことの大切さ」ということが、まず一つとても印象に残りました。今回ご登壇いただいた皆さまは、どのような形であれ、スポーツに出会えたということですが、その裏には出会えていないたくさんの方がいるということが、まず現状としてわかりました。また、スポーツに出会えたことによって、そこから何らかの情報があったり、紹介があったり、次の繋がりに行けるというチャンスを得たということになると思いますが、その繋がり続けるためには、まだ多くの阻害要因があるということも、お話を通じて見えてきました。例えば、松本さんからは、車いすなどの用具は自分で購入するには高いから、気軽に置いてあって体験できればいいというお話がありました。川又さんや松崎さんからは、スポーツクラブに入るにあたって、環境が整っていないこと、様々な制度の壁で跳ね返されたこと、そして、受け入れがない中で、クラブを立ち上げたご苦労についてもお話があったと思います。また、小沼先生のお話からは、特別支援学校の在学中のスポーツ実施においても、様々な制約があるという現状がよくわかりました。将来的に、地域や、身近な場所で、もっと気軽にスポーツができるような制度づくりが茨城には必要であると強く感じました。例えば、拠点となるクラブやそういった場所を作っていく、障害の有無に関係なく、一緒に混ざってスポーツを行う、ウェルカムだよという雰囲気を作っていく、そういった場所が、点在していることが茨城では大事なんだろうと思います。例えば、同じバドミントンコートで、知的障害でも、発達障害でも、車いすを使っている人でも、どんな人でも一緒にバドミントンを楽しんでいる、そんな環境ができていくことが、これからの茨城にとって必要だということを強く感じました。

そのためには、「点を面に」していく。制度面では、自治体の方にご協力いただきながら進めていければいいと思いますし、社会福祉協議会さんや、それぞれの競技団体等が繋がっていくことが鍵になると思います。今は、それぞれが縦割りになっていることが弊害になってしまっているため、そこをうまく繋ぎ、「点を面に」していくことが、これからの茨城で必要になってくると思います。そのために、私たち研究会としても、少しずつですけれど、県の方にも働きかけて、なんとか茨城の中で、「気軽にスポーツができる！」「スポーツっていいものだよ！」「誰でもウェルカムだよ！」という環境を作っていけたらいいなと思います。本日はどうもありがとうございました。